

## 野生生物に現れ始めた放射能の影響 ～鳥類の激減・奇形 チェルノブイリでも同じ現象が！～

年に一度開催される教職員の大規模な研究大会に参加してきた。理科教育の分科会に参加したのだが、福島第1原発事故と放射能汚染に関するレポートに大きな関心が寄せられた。原発に関する情報量が急速に減少しているが、被災地や高線量汚染地域の学校教育の状況は深刻だった。「収束宣言」とは程遠い現実には戸惑う子どもたち・保護者、そこに寄り添う教職員の姿は痛々しく、行政機関の無策に参加者一同怒りを感じずにはいられなかった。

明らかに高線量に汚染された場所に立ち入りを禁じる表示を出すと、「無用な不安を煽る」とされて撤去されてしまうなど、放射能に関する情報を極力知らせないようにする状況が出現しているというのだ。

様々な理由で汚染地帯に留まって生活している子どもたちに、少しでも被ばく量を減らそうとする現場の努力を潰してしまうなんて……。

「絆」の裏側で情報隠蔽が着々と押し進められる不条理をいったい誰が正してくれるのだろうか。

さて、とても気になるニュースが昨日からネットで流れていたが、今日になって新聞にも大きく掲載された。

原発周辺の野生生物の異常が研究チームの調査によって明らかになった。主なポイントを整理すると

- ① 鳥類の生息数が減少している。
- ② 減少の程度はチェルノブイリの原発周辺よりも影響が大きい。
- ③ オスの生殖能力が低下している。
- ④ 脳が萎縮している個体が発見された。
- ⑤ DNA変異の割合が上昇。
- ⑥ 昆虫類の生存期間が大きく減少。

①～⑥の現象はチェルノブイリ原発周辺でも観察されたことばかりだ。

農薬などの例からわかるように、野生動物や昆虫類は人間よりも環境の変化に敏感に反応する。

原発事故と放射能汚染という同じ条件の下で、野生生物で同じ影響が観察された。

⇒ 「人においても、今後、チェルノブイリと同じ病状が現れる」ことはほぼ確実である。

ということが容易に予想できるということだ。深刻な事態が今、細胞レベルで静かに進行している。初期症状と思われる突発性の鼻血や倦怠感などが多数報告されているが、内部被ばくによるDNA変異が継続的に続けば予想もしない症状がさらに増加し、最終的にはガンなどの重篤な症状として出現してくる。今はまだ潜伏期の段階にあるといえる。ヒロシマの被ばく医師、肥田舜太郎氏によれば、「ヒロシマでも、初めはあまり症状は現れなかったが1年後ぐらいから「わけもわからない症状が多発してきた」」そうだ。そのほとんどは「原因不明」とされてきた。

被爆者救済はいつこうに進まず、長い闘病生活の果てに多くの人々が亡くなっていた。それは今も続いている。チェルノブイリの歴史に学び、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の苦悩を繰り返させないためにも、しっかりと調査が欠かせない。

2012年(平成24年)2月4日(土曜日) 北海道 青森

福島

## 原発周辺の鳥減少

英紙報道 日米研究チーム調査

【ロンドン共同】3日の英高級紙「インディペンデント」は、東京電力福島第1原発の事故による環境への影響を調べている日米などの研究チームの調査で、同原発周辺で鳥の数が減少し始めていることが分かったと報じた。調査結果は来週、環境問題の専門誌で発表される。

研究チームは、1986年に事故が起きたウクライナのチェルノブイリ原発と福島第1原発の周辺で、放射性物質放出による生物への影響を比較調査するため、両地域に共通する14種類の鳥について分析。

福島の方が生息数への影響が大きく、寿命が短くなったり、オスの生殖能力が低下したりしていることが確認されたほか、脳の小さい個体が発見された。このほか、DNAの変異の割合が上昇、昆虫の生存期間が大きく減少するなどの影響も見られた。

## 鳥に現れた異常、チェルノブイリと動物

～ National Geographic News 2011. 4. 26 より～

チェルノブイリ原発周辺の鳥類調査結果が出されている。ツバメの異常発生率が高くなったようだ。ツバメは巣作りの材料に泥を使う。泥は雨水が集まるところにできる。環境が汚染されていると放射能は泥に集まってくるのだ。春を迎え、南国からもどってくるツバメたちは人家などに巣をつくる。地域によってはこうしたツバメが運ぶ巣の泥が高濃度に汚染されている可能性がある。今でも全国各地で雨水が集まってくるような場所で高濃度の放射能が見つかる「ホットスポット」と呼ばれる場所が次々と発見されている。地域の放射能汚染状況を知る手がかりとして、ツバメの巣の汚染を調べることは有効な方法になるだろう。

National Geographic News より

チェルノブイリの高度汚染地域に生息するツバメの異常発生率が、かなり高いことがわかった。

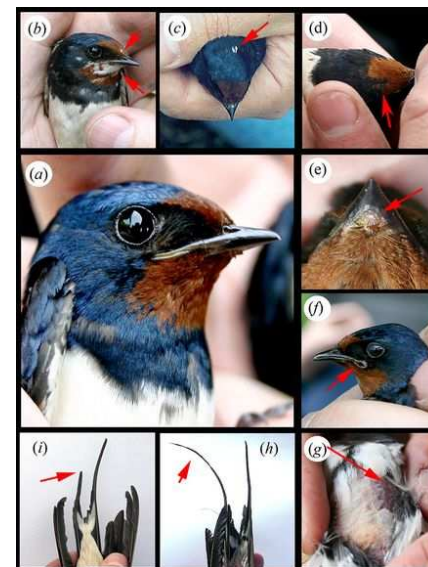
- 部分的な色素欠乏 (b, c, d)、
- クチバシの奇形 (e, f)、
- 曲がった尾や左右不均等な尾 (h, i)

などが発見されている。生物学者ティモシー・ムソー (Timothy Mousseau) 氏と、協力者でフランス、オルセーにあるパリ第11大学のアンダース・モラー (Anders Moller) 氏は、チェルノブイリで10年余り鳥類の個体群調査を続けてきた。

最近の統計結果では汚染地域の多様性が低下しており、**鳥類の種は非汚染地域の約半分に減り、個体数は約40%まで減少し、脳のサイズも小さい。**

「初めて調査に乗り込んだ2000年時点では、異常など見つかる訳はないと思っていたんだ。1986年の原発事故は鳥類に大きな影響を与えていないというのが当時の認識だったからね」とムソー氏は話す。

一方で何も影響を受けない鳥もいる。目立たぬ体色で渡りをしない種がそうだ。「競争相手がいないせいもあるだろう」とムソー氏は推測する。「色鮮やかな羽毛をまとう種と違い、カロテノイド(天然色素の一種)を大量に消費せずに済む。強力な抗酸化物質であるカロテノイドには、放射線被曝の影響を抑える作用が期待できるし、長距離移動で余分なエネルギーを使わないので免疫系が強いのかもかもしれない」。



鳥類は移動距離が長く、放射能の影響は少ない部類に入る動物だが、汚染地帯に留まって生活する哺乳類などには深刻な異常が出ている。インターネットなどではこうした画像などを見ることができ、正視に堪えないほどの奇形だ。

しかし、IAEA(国際原子力機関)やICRP(国際放射線防護委員会)は原発事故との因果関係は一切認めていない。

「チェルノブイリハート」という映画が各地で自主上映されている。映画のタイトルは、原発事故の放射能によって欠陥を持ってしまった子どもたちの心臓(ハート)からつけられている。映画には多数の身体的奇形や脳の発達障害の子どもたちが登場する。私たち大人はこの現実を目を閉じてはいけぬ。直視し、同じことを繰り返さないために行動を起こすことが責任のとり方だ。

